
恋詠花

館野寧依

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋詠花

【Zコード】

Z0649BA

【作者名】

館野寧依

【あらすじ】

アイシャは大国トゥルティエールの王妹で可憐な姫君。だが兄王にただならぬ憎しみを向けられて、王宮で非常に肩身の狭い思いをしていた。

そんな折、兄王から小国ハーメイの王に嫁げと命じられたアイシャはおとなしくそれに従う。しかし、そんな彼女を待っていたのは、手つかずのお飾りの王妃という屈辱的な仕打ちだった。それは彼女の出自にも関係していく……？

これは後の世で吟遊詩人に詠われる一人の王と一人の姫君の恋

物語。

オルデリード大陸第一の大国、トゥルティエール。

「この国はまだ二十歳そこそここの若い王が統治している。名をルドガーと言い、典型的なトゥルティエール王族の特徴である白金の髪と青灰色の瞳をしていた。

そして、その彼にはこの国の王族ではあり得ない灰桜色の真っ直ぐな長い髪に胡桃色の瞳を持つ妹姫がいた。

「アイシャ様、陛下がお呼びでござります」

やや年かさの侍女であるライサが知らせてきたのを受けて、アイシャは少々慌てる。

兄王とは折り合いが悪く、普段アイシャは彼にないものとして扱われていた。

それが、今回の唐突な呼び出しだ。

ルドガーには意図があるのだろうが、アイシャはそれがなにかも想像がつかない。

「まあ、陛下がお呼びだなんてなにかしら……？ 良いことであればいいのだけれど」

それでも久しぶりの兄王との対面にアイシャは心を浮き立たせていた。

ルドガーとの折り合いは悪いが、アイシャは決して兄王を嫌つているわけではなかつた。

「アイシャ様、陛下の御前に出られるのですから、その前に髪を少し結いましょう」

「あ、そうね。衣装はこれでいいかしら？」

ライサの言葉にアイシャは素直に頷くと、自らを見下ろした。

今日のアイシャは象牙色のやや控えめな意匠のものを身につけていたが、これは髪型でそれなりに華やかになるだろう。

美しい灰桜色のアイシャの髪は結わずにいても充分見事ではあったのだが、ただでさえアイシャに厳しいルドガーの前に出るのにそれでは体裁が悪いだろうとライサは考えたのだ。

「はい、よろしいと思いますよ。それでは、姫様こちらへ」

ライサに導かれて、アイシャは衣装部屋の鏡台の前に座った。ライサに髪を丁寧にブラシでかけられると、アイシャの髪はより美しい艶やかさを醸し出した。

「本当に素敵なお髪ですわ、アイシャ様」

「……ありがとうございます」

大事にしている髪をライサに褒められたのと、久しぶりに兄王に会える嬉しさとで、アイシャは頬を綻ばした。

ライサはアイシャの両方の横の髪を結うと、そこを白い咲きかけの薔薇と白い小花で飾る。

そうすると、アイシャの可憐さがより引き立ち、まるで妖精のように見えた。

「さあ、出来ましたわ。それでは陛下の元へご案内します」

「ええ」

大きな姿見で自分の姿を確認していたアイシャがそれに微笑んで答えた。

「これなら、きっとあの方もみすぼらしいとはおっしゃらないわ。

ルドガーにいつも厳しい言葉ばかりかけられているアイシャもこの态度の出来映えに満足して、ライサの先導でルドガーが待つ謁見の間へ向かった。

その謁見の間の玉座には、ルドガーが肘をついてなにかを考え込むようにして座っていた。

「お呼びでござりますか、陛下」

アイシャは兄王の前で姫君らしく正式な礼をする。可憐なその様子をつまらなそうに見やりながら、ルドガーは早々に話を切りだした。

「……この度、おまえの婚礼の話がまとった」
控えめにたたずんでいたアイシャはその言葉に衝撃を受けたようにルドガーの顔を見返した。

「わ、わたくしの婚礼でござりますか……？」

王妹たるもの、いつかは来る話だとアイシャも思っていた。

ただ、それがこんな急に訪れるものだとは思つてもいなかつた。

「おまえの嫁ぎ先はハーメイだ。下賤の出のおまえが小国とはいえ、国王の正妃となれるのだ。ありがたく思うのだな、アイシャ」

ルドガーがアイシャを下賤の出と言つたのには訳があつた。

彼女は先王の第二王妃の娘だが、先王とは血の繋がりのない姫だつたのだ。

つまり、ルドガーとアイシャは兄と妹という関係ではあるが、まったくの赤の他人だつた。

そして、彼とアイシャが折り合いが悪いのもこれに起因していた。

「……ハーメイ……」

わたしがハーメイの王妃に。

確かにわたしの出自から考えたら、少しその良い話はないのか

もしけないわ。

それでも突然訪れた自分の婚姻話に、アイシャはうろたえてしまふ。

下賤の者と蔑まれても、まだアイシャはこのトゥルティエール王宮に身を置いていたかったのだ。

「これで賤しいおまえと縁が切れると思うと清々するな。……ただ、おまえはこの大国トゥルティエールの王妹として嫁ぐのだ。このわたしに恥をかかせる真似だけはするな」

「は、はい」

ルドガーの辛辣な言葉にアイシャの身が震える。

アイシャは泣くまいと思つたが、その瞳には既に涙が浮かんでいた。

優しい言葉など望めるはずもなかつた。

しかし、アイシャはどうしても彼にそれを期待してしまつのをやめられなかつた。

……だが、空しいその時はもつ終わりを告げるのだ。

自分がこの王宮から出てしまえば、彼とはもう一度と会つことはないのだから。

「……泣いて同情を誘つつもりか。おまえは本当に浅ましい女だな

ルドガーが心底嫌そうに言つ。

すると、アイシャの頬を涙が伝つていつた。

陛下は本当に優しくない、とアイシャは思つ。

けれど、それは仕方のないことなのだ。

わたし達が彼から奪つてしまつたものははとつもなく大きい。

「わたしの前で泣くな。鬱陶しい」

「は……い、申し訳、『ございませ……』」

ルドガーの叱責に涙を止められなくなつたアイシャをかばうようにしてライサがその前に立つた。

「御前失礼いたします。陛下、アイシャ様はもう下がられてよろしいでしょ？ 姫様はお話ができる状態ではございませんし」

「ラ、イサ……」

アイシャがただ一人信頼のおける侍女の名前を呼ぶと、ルドガーは忌々しそうに顔をしかめた。

「いや、いい。もう話は済んだ。わたしがここを出でこぐ。ライサ、その鬱陶しい女をどうにかしろ」

「……かしこまりました」

ライサが頭を下げると、ルドガーは玉座から立ち上がりその場を去つた。

ライサから手巾ハンカチを渡され、アイシャは涙を拭ぐと大きく息をついた。

「……ライサ、『ごめんなさい』。『こんなふうに取り乱してしまって』『アイシャ様は気になさらなくてよろしいのですよ』……それにしても、急なお話でしたわね」

「ええ……」

安心させるかのように優しく語りかけるライサに幾分落ち着いたアイシャは頷いた。

確かに急な話だった。

王族と名乗ることすらおこがましいと自分でも思っていたアイシャは、いざれはこの国の貴族にでも降嫁することになると思つていた。しかし、それがまさか隣国の王の花嫁とは。

「でも、これもよい機会かもしませんわ。アイシャ様はこれまでのことはお忘れになつて、ハーメイの国王様とお幸せになられるとよろしいのです」

「……ええ」

ライサの慰める言葉に、しかしアイシャはどこか哀しそうに頷いた。

多分あの方と会つのはこれが最後だらつ。

……結局、この想いは告げることすら出来なかつた。

「アイシャ様……」

ライサが衣装の胸元を掴みながら俯いたアイシャを気遣わしげにのぞき込む。

アイシャはつこで叶つことのなかつた恋の痛みに、いつの間にか涙を流していた。

「……アイシャはビリしてこる」再びライサだけを今度は執務室に呼び出したルドガーは、気がかりそうに眉を寄せて尋ねた。

先程アイシャが自分のきつい言葉で涙を流していたことをルドガーハ内心では気に病んでいた。

「今は落ち着いておられます。……後で心配なさるくらいなら、最初からあのようなことをアイシャ様に申し上げなければいいのですわ。……アイシャ様には突然他国へ嫁ぐ、悪いもあるでしょうに、その上でのおつしやつよづはあまりにもお可哀想です」

「う……む」

ライサの小言にますますルドガーの秀麗な顔が歪む。

出来れば、こんな時ぐらいは優しい言葉をかけてやるべきだったかもしねれない。

しかし、長年の習性というのほは簡単には抜けないものだ。それに、今回仕方なくアイシャを他の男に渡すことに決めたのもそれに拍車をかけていた。

ルドガーは本当はアイシャのことを愛していた。 それもかなりの長い間。

出来ることならば、アイシャを誰にも渡さずに自分のものにしてしまったかった。

だがそれは、アイシャ母娘がこの城に現れた時点での許されないことだと運命づけられていたのだ。

ルドガーは思い返す。

忘れようにも忘れられない、その日のことを。

事の始まりは先王「ディラック」が城に招いた美貌の踊り子クリスティナに恋をしたことによる。

その当時、ルドガーは十歳だった。

「ディラックがクリスティナを第一王妃に据えることに決める」と、当然正妃を含む周囲は反対した。

おまけにクリスティナには死別した夫との間に娘がいたのだ。それがアイシャだった。

「卑しい踊り子などを妃に据えるなど、聞いたこともございません！ どうか、陛下お考へ直しちゃいます。聞けばあの女には連れ子までいるというではありませんか。陛下は、トウルティエール王家に卑しい血を混ぜるおつもりなのですか！？」

今までディラックは一夫多妻制にも関わらず、今まで他に妃を娶らずにいた。それは確かに彼がオーレリアを愛しているという証でもあつた。

そしてその寵愛を一身に受けっていたはずの正妃オーレリアは国王「ディラックに必死に訴えた。

「……黙りなさい。そなたのそんな言葉は聞きたくない。それに、もつここれは決定したことです」

静かに言つ「ディラックに、オーレリアは愕然とその場に立ち去ります。

「……第一王妃を部屋に連れて行きなさい。なるべく気を高ぶらせないよう」「たゞ」

正妃ではなく、わざとかのよつた第一王妃といつ言葉はオーレリアの逆鱗に触れた。

「すべて陛下のせいではありませぬか！ わたくしは認めません！ 絶対に許しませんわ！」

近衛や侍女に無理引きずられるように連れられながら、オーレリアは絶叫する。

その様子を苦々しい様子で、見つめていたディラックは侍女長に

命じた。

「王と妃の間の扉を全て施錠するよう」

それを聞いた者達は思わず息を飲んだ。

それはすなわち、王が正妃を拒絶したも同然ということだ。

「陛下……、それはあまりにもオーレリア様がお氣の毒ですわ」

今まで共に国のために尽力してきたといふのに国王のこの仕打ちはあまりに冷酷すぎる。

「オーレリアには正妃という身分がある。それだけで充分でしきう。……それよりも正妃がクリスティナ達に手を出さぬようによく見張つておくよう」。あの様子ではかなり不安だ」

「父王っ、母上に対してもその仕打ちはあまりにも酷すぎます」それまで黙つて事態を見守っていたルドガーが苦言を呈した。

しかし、それを国王は鼻で笑つた。

「まだ成人になるのに年数があるそなたがなにを生意気なことを言いますか。そんなことは政務のこと」を少しは理解できるようになつてから言いなさい」

「……正妃を疎かにして、ビヒの馬の骨ともしれない女性を寵愛すること」が政務ですか」

十歳の子供とも思えない大人びた口調でルドガーが正論を言つ。一瞬、ティラックは絶句すると、ややして氣を取り直したようにルドガーに命令した。

「黙りなさい。いざれおまえに約束された王太子の身分を破棄してもいいのだぞ。……そうすれば、おまえの母は正妃である必要もなくなる」

国王ティラックは、穏やかな口調に隠した牙を血を分けたはずの息子に剥ぐ。

「……あなたは！」

拳を握つて王に飛びかかるとするルドガーを近衛兵達が必死に止めた。

ここでルドガーが王に危害を加えては、この国は本当に後継者がいなくなってしまう。

ディラックは羽交い締めにされるルドガーを冷たく一瞥すると、クリスティナ母娘に用意された部屋へと足を向けた。それをただ見ているしかできない己の無力さに憤りながら、ルドガーは涙を堪えていた。

「あつ、おうわまー」

「アイシャ」

アイシャがディラックの姿を認めるに美しい灰桜色の髪をなびかせて駆け寄つていった。

「そういえば、アイシャ。歳はいくつになりますか」

「七歳です」

ディラックに抱き上げられながら、幼いアイシャは愛らしく答える。

その様子にディラックは相好を崩した。

「そうですか」

成さぬ娘ではあるが、アイシャはとても可愛らしく、いつまでも愛でたくなる。

クリスティナとはあまり似てはいないが、それでも成長すればさぞ美しい姫になることだろう。

「そなたにはいつか、似合ひの相手を用意しましょう。……そして、素晴らしい地位も」

その言葉が理解できないアイシャはきょとんとしてディラックを見ている。

「……陛下。わたし達はここにまは留まらない方が良いのでは。第二王妃の地位など、わたしには過ぎますわ」

楽団の仲間と引き離され、無理矢理に王宮に押し込まれたクリス

ティナがあまりの大事に顔色をなくしている。

デイラックはアイシャを床におりると、不安げなクリスティナを抱き寄せた。

「わたしはそなたを離しませんよ、クリスティナ。正妃が既にいなればそなたをその座に据えたいところです。いえ、第一王妃をどうにかすればあなたを正妃に出来ますね」

それは正妃をいつ排除しても構わないのだという非情な言葉だった。

「！ そんな、それでは正妃様がお氣の毒すぎますわ。お願ひですから、一度とそんなことはおっしゃらないでくださいませ」

クリスティナが首を横に振つてデイラックに懇願する。

「……あなたがわたしを愛すると誓つのならば、一度と口にはしませんよ、クリスティナ。愛しい人」

一人のただならぬ様子を幼いアイシャが目にして固まつてゐる。その体をアイシャの侍女のライサが慌てて抱き上げて、別室に連れていつた。

「……誓います。ですから、かつての仲間にも、正妃様にも酷いことはなさらないでください」

「分かってくださればよいのです。クリスティナ、愛しています」「これ以上ない程の優しい笑みを浮かべながら、デイラックがクリスティナに口づける。

いわば、クリスティナは仲間達の命と引き替えに無理矢理その地位に就かされた囚われの王妃だった。

そしてクリスティナは己の運命を恨みながら、この王が誓いを守つてくれるのを祈ることしかできなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0649ba/>

恋詠花

2012年1月1日21時47分発行